

19世紀初頭のフランスにおける感覚概念について

三 原 智 子

Sur le concept de sensations en France au début du XIX^e siècle

Tomoko MIHARA

群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編

第72巻 93—106頁 2023 別刷

19世紀初頭のフランスにおける感覚概念について

三原 智子

群馬大学共同教育学部英語教育講座

(2022年9月28日受理)

Sur le concept de sensations en France au début du XIX^e siècle

Tomoko MIHARA

le département de l'éducation anglaise, à la faculté coopérative d'éducation, Université de Gunma

(Accepted on September 28th, 2022)

はじめに：感覚と文学

文学テキストにおいて描写は視覚、聴覚、触覚、嗅覚の言及を伴って成立する。言及は時に味覚にも及び、作者によっては、超感性的な直観により獲得された諸印象にまで及ぶ。このような描写は読者に感覚の対象を説明すると同時に、感覚が帰属すべき何らかの主体も示唆する。例えば、言及される様々な感覚の印象が一個の主体に統合されるか否かは、描写において判明する。統合される場合、描かれる諸印象は首尾一貫性を持ち、たとえ文章中に登場人物として明示されない場合でも、一個の主体（目撃者＝語り手）がそこに隠れて存在することを示唆する。統合されない場合、各感覚は複数の主体に属すと見なし得る。また、すべての諸印象が主体の意識に上るのか、あるいは主体に認識されない諸印象の存在が想定されているのかも、描写の中で明らかになる。さらには、主体が五感に関わらない超越的な直観を備えていて、それによって対象をとらえるのかどうかも描写において示される。これら感覚と主体との関係は文学テキストにおける描写の前提であるが、この関係もまた同時代の思想を前提とし、その影響を受ける。

19世紀後半のフランス文学においては、主体（登場人物）の意識を逃れる諸印象への言及により、事物が描かれ始める。これは当時のフランス思想において、感覚と意識の同一視からの脱却が起こり、意識のコントロールを超えた感覚の存在が認知され始めたことと歩みを一にする。フィリップ・デュフルによれば、1857年に出版されたギュスターヴ・フローベールの『ボヴァリー夫人』の中で、風景の描写は、登場人物が無意識に受容している諸感覚の印象を通して行われる。野原の情景の視覚印象や聴覚印象を受容するのは非人称主語の *on* である (*on s'apercevait, on n'entendait que*)。野原にただ独り立ち、唯一の証人であるはずの「彼女」は知覚動詞の主語にならない。知覚は「彼女」の自我に属さない。別の言葉で言えば、ここでは、感じることに意識することが別なのだ。デュフルによれば、人格の支配を免れたこれらの諸感覚は、メーヌ・ド・ピランが考察した「曖昧な知覚 (*perceptions obscures*)」に類似する。そして、フローベール以降、モーパッサンやゾラのテキストにおいても同様に、登場人物の自我とは無関係な感覚を通して事物が描写される¹。

本稿は、19世紀初頭のフランスにおける感覚概念の変遷を考察し、かつ、感覚と意識についての新しい

見方が哲学者のサークルを超えて一般に流布し始めたことを検証する。本稿の目的は、感覚観の変化を明らかにすることによって、今後の19世紀フランス文学における描写研究の基盤を形成することである。以下、第1章では観念学派 (idéologues) における感覚と主体の関係を論じ、第2章では医学事典における定義を分析する。

1. 18世紀後半から19世紀初頭の感覚概念

コンディヤック

最初に、19世紀初頭のフランス思想界に強い影響を与えた、コンディヤックの『感覚論』を考察する。コンディヤック (Étienne Bonnot de Condillac) は18世紀フランスの思想家で、イギリス経験論のジョン・ロックの影響を受け、感覚を精神機能の起源とみなした。『感覚論』によれば、「判断、思考、欲望、情熱等は別様に変形した感覚に過ぎない」²。この命題を証明するため、コンディヤックは嗅覚のみを有する彫像を仮定し、匂いの受容が彫像の内面に引き起こす事象を記述する。バラの香りを初めて嗅ぐ時、彫像の心的機能はこの香りの感覚に集約され、それはやがて注意 (attention) へと変容する (S58)。香りが消えた後も注意は継続し、それが記憶 (mémoire) を生む (S61)。さらに、記憶に残る過去の香りとは新たに与えられる現在の香りとは注意を同時に向けることで、比較 (comparaison)、さらには評価 (jugement) が生成する (S65)。また、心地よい香りと不快な香りをかぐことで、一方に対する満足と他方に対する不満足、一方への欲望と意志 (volonté) が生じる (S91-95)。その他、あらゆる精神機能が感覚の変容態である (S121-122)。意志や思考など人間の自由や能動性を構成する機能さえ、外部刺激の受容から始まる。外部の影響を受けない、純粋な能動性は精神機能の中に存在しない。先験的な魂 (理性) の存在は否定される。

我々にとって、また、文学テキストの描写において重要なのは、コンディヤックが意識されない感覚を考慮に入れないことである。彼にとって、刺激の受容はその刺激の知覚に等しい。たとえ慣れにより後に気づかれなくなることがあろうとも、すべての感覚はいったん意識される³。自我の成立以前の、嗅覚しか持たない彫像でさえ、初めて嗅いだバラの香りに気づく。ただし、この時点で彫像の内心に起こることは、彫像 (主体) がバラ (客体) の香りを嗅ぐという事態ではなく、ただ、彫像がバラの香りであるという事象だ (S56-57)。

彫像が主体となり、匂いを対象として捉えるためには、自我の成立が不可欠である。コンディヤック自身はそれと明言しないものの、『感覚論』の読解から導き出されるのは、自我が二段階を経て生成することだ。第一に、記憶が彫像に生じた時、彫像のうちにいわば原初的な自我が芽生える。彫像は過去に嗅いだ匂いと現在の匂いとを差異を比較し、変化のうちで変わらぬものに気づく。その変わらぬものが彫像自身の人格、すなわち、自我 (moi) である (S118)。ただし、時間の経過と諸刺激の到来によって芽生えたこの自我意識は、いまだ不完全なものに過ぎない。彫像は色や音や味覚を自分自身に属するものと見なし続け (S24)、匂いや音を備えた物体の存在、つまり、自己と異なる他者の存在に気づかない (S413)。彫像が自他の区別を得て、外部の物の存在と十全たる自己の存在を意識するためには、運動機能と触覚を得ることが必要である (S30)。これが自我の第二の生成だ。彫像は手を動かして自身の身体に触れて初めて自己に気づき (c'est moi)、かつ、拡がりを持った固体物にぶつかることで、他者の存在を知る (S188-190)。そして、この触覚体験を他の感覚に援用することで、各感覚刺激を自らの属性にではなく、外部の対象に帰すことを知る。触覚が他の4つの感覚を他者に向かわせるのだ (S142-143)。

コンディヤックはこの自我の成立の各段階で、彫像がそれぞれに程度の異なる能動性を得ると考える。まず、記憶を獲得した第一段階で、彫像の精神はいわば相対的な能動性を持つ。すなわち、彫像が何らかの印

象を感じる時、その心的機能はより受動的だが、その印象を思い出す時、より能動的である (S63-64)。前者において、印象は外部からの刺激に由来するが、後者の場合、記憶の中に蘇ってくる印象は彫像自身の中に由来するからだ。ただし、彫像自身は外部の物体の存在を知らないため、自らの能動性と受動性を識別できない。外部刺激による印象にせよ、記憶印象にせよ、彫像にとっては等しく自らの変容 (modification) である。第二に、彫像の心的機能は、触覚ならびに運動能力の取得により真の能動性を得る。例えば、コンディヤックは視覚について次のように記す。

視覚はそれが彫像の唯一の感覚である時は、ほぼ受動的 (passive) だったが、触覚と結びついてからは、より能動的である。視覚は能動的 (active) になる。なぜなら視覚は、諸対象を定めるように与えられた力を使うことを学んだからだ。視覚は諸対象が働きかけるのを待たず、それらの作用を迎えに行く。一言で言えば、視覚は見る (regarder) ことを学んだのだ。(S339-340)

「目は生来、何らかの印象を目に与えるすべてのものを眺める (voir)」。しかし、「見る (regarder) ことを学ばない限り、目は識別しない」。目が図形を識別するには、触覚の介入が必要である (S26)。

逆に言えば、記憶が成立しない場合、そして、触覚ならびに運動性との協同を欠く場合、彫像は受動的なままであり、刺激の受容に気づくが、自他の区別を知らない。彼の視覚や聴覚は精神機能というよりむしろ、外部刺激に対する身体の機械的な反応に近い。もちろんコンディヤックの見取り図では、受動的な感覚は、予期せぬアクシデントが起こらない限り、必ず能動的になる。感覚は注意や記憶への変容を経て、判断や思考等のより高度な精神機能にまで継続的に変容する。しかし、彼の後継者の中には、精神の能動性を重視するあまり、受動性を精神から排除する者、受動と能動の継続を断ち切る者が現れる。彼らはそれにより逆説的に、感覚そのものの受動性 (身体性) を際立たせていく。

トラシー

観念学という言葉の提唱者、デステュット・ド・トラシー (Antoine de Destutt de Tracy) はコンディヤックの著作に強い影響を受け、彼と同様に感覚を心的機能の発生の起源と見なし、先験的な魂の存在を否定する⁴。19世紀初頭に出版された『観念学の原理』によれば、感覚するとは思考するに等しく、ひいては存在するに等しい (E3/164)。ただし、トラシーはコンディヤックとは異なり、運動性を感覚と並ぶ人間の基本能力と見なす。

我々個人全体を全面的に考察しなければならない。二つの主要な現象がそこで注目される。一つは印象を受け取り知覚を得るといふ、一言で言えば、変化を感じ意識するといふ、我々が持つこの力、この能力である。これは、言葉の最も広い意味で、我々が思考能力あるいは感覚能力と呼ぶものだ。もう一つは、自分の身体の様々な部分を動かし移動させて、自分と無縁ないかなる物体の直接的作用にも強いられず、すべて自分の内部に存在する力によって、内的であれ外的であれ無数の運動を実行するといふ、我々が持つこの能力ないしは力である。これは我々が運動能力と呼ぶものだ。(E1/231)

感覚と運動のうち、人間の能力の基盤となるのは後者である。なぜなら感覚が他者からの刺激を必要とするのに対し、内的運動の方は外部の物体の影響を受けず、自発的に作用するからだ。しかも、そもそも感覚 (思考能力) 自体が「我々の内部で行われる運動の産物なのだ」(E1/242)。

我々にとって重要なのは、トラシーが刺激を被ること (触発 affection) と刺激を知ること (意識

connaissance) を区別しない点である。彼によれば、両者の「区別には根拠がなく、我々の意識の能力は触発の能力に由来し依存していて、今度はそれが触発の能力を生み出す。思うに、両者は密接に結びついて切り離せず、二つとも感覚能力の不可欠で不可分な構成要素であり、感覚能力は何よりその全体において考察されなければならない」(E3/162)。感性とは、「印象を受け取ってそれに触発され (affectés)」、かつ、「知覚を得てそれを意識する」ことを指す (E3/161)。したがって、人間は感覚器官が受容する限りにおいて、原則的にすべての刺激に気づく。感覚能力を有する生物が「自分が感じるものを確信していない」ことはあり得ず、人を含め生物にとって感覚は、「最も機械的で単純な感覚から、最も知的で複雑な知覚にいたるまで」、確かである (E3/165-166)。人が感覚を意識しなくなるのは、匂いや光などの刺激があまりにも繰り返し受容されたため、そこに介在する内的運動が速くなり過ぎる場合だけだ (E1/258)。コンディヤック同様、トラシーにとっても、人は慣れによってのみ、当初は気づいていた感覚に気づかなくなる。

結局、トラシーにおいては、感覚の属性をめぐる身体と精神とが拮抗する。感覚を生み出すのは生理学的な内的運動である。したがって、感覚は運動能力、すなわち身体の機能に依存する (E1/231)。しかし同時に、感覚は精神の起源であり、自身を起源とする精神 (意識) から独立して存在し得ない。しかも、感覚において、より身体的な「触発」をより精神的な「意識」から切り離すこともできない。

ラロミギエール

これに対し、トラシーと同時代の思想家でコンディヤックに影響を受けたラロミギエール (Pierre Laromiguière) は精神の独立に拘る。彼は精神を身体への依存から脱却させるため、コンディヤックの感覚主義に大きな変更を与え、感覚ではなく注意 (attention) を知性 (entendement) の起源と見なす⁵。ラロミギエールはその名著『哲学講義あるいは魂の機能についての試論』において次のように記す。

注意は魂の最初の機能である。他の機能は注意によって存在し、注意に起源を負っている。注意は、比較、推論、欲望、好み、自由の中に見出される。これらの機能はすべて注意深くあることのような状態に過ぎない。注意をなくせば、すべてがなくなる。さて、もし注意が知的機能と道徳的機能の原理もしくは起源であるならば、それは知性と意志の原理である。それは思考の起源なのだ。(L355)

注意は一つの対象への精神の集中だが、二つの対象に向かうと比較になり、隠れた対象に向かうと推論になる。注意こそが様々な精神機能の起源である。それに対し、感覚は「我々の身体の神経線維に刻まれた諸運動の結果」に過ぎない (L158)。感覚は精神作用ではなく、身体作用である。別の言い方をすると、「注意が本質的に能動的である」のに対し、「感覚はまったく受動的である」。感覚が外部由来の刺激をきっかけにした「外から内へと向かう運動の結果」であるのに対し、注意は「内から外へ向かう」のだ (L163)。

ただし、トラシーが精神の起源を知るために感覚の生成の仕組みを問い、そこに生理的な運動の関与を見出したのに対し、ラロミギエールは注意すなわち「魂の最初の機能」がどのように生まれるのかをあえて問わない。「注意も魂の能動性も定義されないだろう。なぜなら魂の中には能動性より前のものは何もないからだ。すなわち、能動性が起源をそれに負い得るような以前のものなど何もない」(L165)。何より、「魂の諸機能はその存在に関して身体の構造に依存しない」(L241)。したがって、「我々の能動性の最初の行使」たる注意について、その起源を身体的に説明することは不可能だ (L164)。注意はその意味で先天的である。

本稿の議論にとって意味深いのは、ラロミギエールにおいては感覚 (身体機能) と注意 (精神機能) が分割可能になることである。「感覚は注意無しに起こり得る」し、「我々は感じるものにめったに注意を払わない」(L161-162)。つまり、感覚は我々の意志とは無関係に、かつ、我々が意識しないままに機能し得るのだ。

例えば、ラロミギエールは視覚について次のように記す。

我々は見ている (nous regardons) ものより多くのものを眺めている (nous voyons)。このことは否定できない。我々は網膜上に感知し得る印象を与えるようなすべての対象を眺めるが、我々が目を向けるものしか見ない。故に、我々の中には注意の行為よりも多くの感覚があるのだ。未知の言語で書かれた頁が私に提示される。私は最初、多数の混乱した感覚を受け取る。注意をただ一つの文字に向け、視線をただ一つの点に向けよ。すぐに、以前は漠然と感じられたが気づかれていなかったこの点が、他のすべての点の真ん中に現れる。一方、周囲の文字は単なる感覚しか生み出さずに闇の中にとどまる。すべての感覚について同様だ。感覚の各々が同じ観察結果をあなたにもたらすだろう。例えば、我々は聴くものよりも多くのものが聞こえていることが分かるだろう。(L161)

注意のおかげで感覚は精神と結びつくが、注意を欠いた感覚は単なる「本能的な反応」に過ぎない (L159-160)。ラロミギエールのこの平明な論は、彼の教え子のヴィクトール・クーザンの思考に影響を与え、さらに単純化されたうえで、19世紀の折衷主義 (l'école éclectique) に取り込まれる⁶。

メーヌ・ド・ビラン

本章の最後に、フランス心理学の祖とも呼ばれるメーヌ・ド・ビラン (Pierre Maine de Biran) における感覚と意識の関係を考察する。ビランの思想はその生涯にわたり変化し続けたが、ここでは彼の処女論文『思考能力に及ぼす習慣の影響』を参照する。同論文はコンクールへの応募論文で、審査委員にトラシーら観念学派を数えたため、ビランはコンディヤック以来の主張を受け継ぎ、感覚を生物の営為の最初に置く。「印象を受け取る能力は、生きている有機的存在に現れるあらゆる能力の中で、最初の、そして最も一般的なものである」⁷。生物のあらゆる能力は感覚能力に由来する。しかし、ビランはコンディヤックやトラシーとは異なり、感覚能力を触発に限り、そこに「私」の能動的な関与を認めない。触発とは「私」が刺激を受容することにより変容することであるが、その時、「私が私の変容にいかなる力も及ぼせないこと、その変容を中断したり変えたりするいかなる手段も入手できないことは明白である。故に、私は受動的な状態にあるか、もしくは受動的な状況で私自身を感じている」(H21)。感覚能力しか持たない「私」は、強い感覚を受けると、その感覚そのものと同化する。その時、「私」にとって時空間は存在しない。「私」は何も見分けず、何も理解しない (H22-23)。自他の区別もない。ビランによれば、純粋な感覚生物は記号や概念や記憶を持つことができない (H57-58)。そのような生物は、今ここに起こる刺激を受容するものの、手元に無い対象について精神活動を行い得ないのだ。

この受動的な感覚能力に対置されるのが運動能力であり、これこそが精神の能動性の起源である。ビランは運動を次のように定義する。

私は運動と言う語を、意志のあらゆる行為、脳中枢の原動力のあらゆる発揮を一般的に表現するために用いる。その発揮は、筋肉の動きの実行により外に現れる場合もあれば、単なる決定にとどまり、その決定がいかなる外部の記号も持たずに、私がエフォート (effort) と呼んだものを意識することによって、ただ個人的に現れる場合もある。(H59)

運動は「私」の意志に従い、「私」自身が始め、続け、変化させる (H22)。ただし、運動は手足等の実際の動きとして現れるのみならず、外側には顕現せずに脳内の決定に留まる場合もある。どちらの場合も、運

動にはエフォートの意識が伴う。エフォートは、「私」の運動が外部の物や「私」自身の身体等の抵抗に合うことで生じる。「エフォートは、動く存在、あるいは動こうとする存在と、その運動に対抗する何らかの障害物との間の関係についての知覚を必ずもたらす」(H27)。抵抗なしにエフォートはなく、エフォートなしにいかなる種類の知覚も無い。

さて、ピランにおいても、人間の五感のうち最も能動性（運動性）に優れるのは触覚である。触覚の体験においてこそ、運動の主体としての「私」の自我と、それに対して抵抗する物との区別が明白になる。「私」が自分の手で物に触れる時、物の抵抗を感じ、それが「私」自身ではないことを知り、そこから自他の区別を得る。さらに、運動に伴うエフォートと物の抵抗の相互作用は、「私」に物の手触りや形等を識別させる(H25-26)。

触覚以外の感覚器官はより感覺的 (sensitif)、触発的 (affectif)、受動的である。しかし、それらは触覚との協同により能動性を得る。「あまり動かない器官が孤立している場合、多かれ少なかれ受動的で不明瞭な印象しか伴わないが、運動性に優れた器官との協力や連絡により、自身に欠けている能動性を獲得することができる」(H36)。視覚は触覚との協同によりエフォートの意識を得て、識別力を得る。この時、我々は視覚印象を「感覚」するのではなく、「知覚」するにいたる。

我々の議論において重要なのは、この知覚 (perception) と感覚 (sensation) の区別である。上記で述べたように、ピランの著作において、感覚とは印象 (impressions passives) の受動的な受容に過ぎず、エフォートを欠き、意志を持たない。感覚のみでは自他の区別はおろか、印象同士の区別も難しい(H26)。それに対し、知覚は運動能力が感覚能力に協同することで可能になり、エフォートと関わるがゆえに意志的である。知覚は記憶や判断や思考など、精神の高度な能動的機能へと発展していく(H294)。例えば、記憶は、知覚の際に生じた脳内の運動（とエフォート）を再び脳内で繰り返すことで可能になる(H58)。

むろん、人が五感を働かせる時、感覚能力と運動能力は程度の差はあれ協同している(H24-25)。したがって、人は通常、刺激を「知覚」する。しかし、感覚能力があまりに強く働くと、運動能力が弱まり、知覚は感覚へと退化する(H25)。例えば、あまりに強い光を受容すると、詳細な識別が不可能になる(H36)。逆に、運動があまりに繰り返される場合も、知覚は感覚に変化する。反復により、運動は速やかになり、抵抗を失い、その結果、「意識が無く、意志が無い」オートマチックな反応に変化する(H28-29)。例えば、同じ音を何度も聞くと、神経の運動が速やかになるあまり、人はその音を意識しなくなる。エフォートの欠落とともに、知覚は感覚に替わり、意識されない印象が出現するのだ。ちなみに、ピランは別の論文において、意識の介在しない印象の存在を認め、それをライブニッツの「微小表象 (petite perception)」にちなみ、知覚の定義を変えつつ、曖昧な知覚 (perceptions obscures) と呼んでいる⁸。

2. 事典による普及

ここまで、18世紀後半から19世紀初頭にかけてのフランス思想界、特に観念学派における感覚と意識の関係の議論を、部分的にはあるが考察した。本章においては、両者の関係についての認識がどのように一般に普及したかを、事典を通じて分析する。

百科全書

最初に、18世紀後半のフランスの状況を、ディドロとダランベール編集の『百科全書』(1751-1772年)を通して確認する。『百科全書』は18世紀最大の出版事業で、地上に散在するあらゆる知識を集め、同世代だけでなく後世にも伝えることを目的に刊行された。本文17巻と図版11巻からなり、項目の数はおよそ

74,000に上る⁹。そのうち15項目でコンディヤックの名が引用されている。実際、『百科全書』の感覚概念は、コンディヤック、ならびに彼に強い影響を与えたロックの主張を顕著に映し出す。

例えば、第3巻(1753年)所収の「意識(Conscience)」の項において、執筆者のジョクール(Louis de Jaucourt)は知覚と意識の関係について、次のように述べる。ちなみに、知覚とは『百科全書』の定義によると、「感覚刺激の作用により魂の中に誘発した印象」である¹⁰。

もしロックが主張するように、魂が自ら意識しない知覚を持たず、したがって、ある知覚が魂に知られないのは矛盾であるならば、知覚と意識はただ一つの同じ作用と見なされねばならない。もし反対に、デカルト派やマルブランシュ派やライプニッツ派が主張するように、魂の中に決して意識されない知覚があるならば、意識と知覚は二つのとても異なる作用である。ロックの見解の方がもっともであろう。というのも、魂が多少なりとも何か知ることのない知覚などないと思われるからだ。その結果、知覚と意識は実際には二つの名を持つ同じ一つの作用に過ぎないということになる。¹¹

知覚は意識に等しいのだから、いかに小さな知覚でも人はそれを意識している。ジョクールは意識されざる知覚としてのライプニッツの「微小表象(petite perception)」を決して認めないだろう。彼は大陸合理論に属するデカルトやマルブランシュ、ライプニッツの主張を、その詳細に触れることなく、ひとまとめに退ける。

とはいえ、日常生活においてしばしば人は聞こえているはずの物音に気づかず、見ているはずの光景を認識しない。このような経験はジョクールの主張とは逆に、意識の伴わない知覚の実例となり得る。しかし、第8巻(1765年)所収の「知覚(Perception)」の匿名の執筆者は、人が気づかない音や光景について、「抱いた直後にはもう覚えていないような知覚が私たちの中に起こっていると推定してしかるべきである¹²」と述べる。人は実際にはあらゆる知覚に気づいているが、中には瞬時に忘れられるものもあるため、人はそれらをあたかも意識しなかったかのように錯覚するのだ。

この匿名の執筆者が特に否定するのは、彼が「第二の見解」と呼ぶもので、それによると、脳に伝達されない感覚刺激が「魂」と無関係に存在する。

第二の見解は、脳に伝達されず、したがって、魂の中に知覚を生み出さないような感覚刺激の中では、印象は生じないと言うだろう。そのうえ、知覚は意識されずに存在するか、あるいは魂は知覚を知らずにいると言い足すだろう。しかし、このような知覚の観念を持つことなど不可能だ。気づくことなしに気づくと言う方がまだいい。故に、魂の中に生じる諸印象を我々は常に意識するが、それは時折とても軽い仕方なので、一瞬後にはもうそれを覚えていないのだと、私は考える¹³。

第二の見解の支持者、すなわち無意識の知覚の支持者によれば、脳に伝達されない感覚刺激は「魂」に知られず、音や痛みなどの印象の意識を生み出さない。そのような刺激の知覚は「意識されずに存在する」、言い換えれば、魂の管轄の外に存在する。それはもはや精神作用ではなく、身体的作用であろう。しかし、執筆者は上記のジョクールの主張を受け継ぎ、意識されない知覚の存在を拒否する。彼にとって、我々が気づかなかったかのように見える知覚は、意識された直後に忘れ去られてしまったものなのだ。

このように、18世紀のフランスの出版界は、知覚は意識に等しいとの見解を普及させた。

医学科事典「知覚 (Perception)」

しかし、19世紀に入り新しい医学的知見が広まるにつれ、様々な感覚観が流布し始める。以下、19世紀初頭に公刊された2点の医学事典を参照し、感覚概念が当時の医師にどのように解され、それがどのように広まったかを考察する。

最初に、『医科学事典 (*Dictionnaire des sciences médicales*)』(1812-1822)を取り上げる。19世紀初この大型医学事典は全60巻からなり、医学に関わる諸項目をアルファベット順に説明する。執筆陣はパリ医学界に繋がる臨床医で、精神科医のピネルやその弟子のエスキロール等、著名な学者を数える¹⁴。大手出版社のパンクク社から刊行され、医者や学生など当時の知的エリートを対象に広く販売された。その名声は、この事典が小説『ボヴァリー夫人』において、田舎医者の蔵書として名指されることから推し量られる¹⁵。ちなみに、パンクク社は『百科全書』の補巻を出し、雑誌『メルキュール・ド・フランス (*Mercur de France*)』を一時、所有していたことで知られる。

まず、第40巻(1819)所収の項目「知覚 (Perception)」を確認しよう。パリで学位を取得した医師、レドゥエ (Pierre Reydellet) が執筆した項目だ¹⁶。彼によれば、知覚は以下の順序で成立する。まず外部刺激が感覚器官に受容され、次にその刺激の印象が神経を介して脳に伝達され、最後に印象が意識される¹⁷。『百科全書』の「知覚」の項目が常に「魂」に言及していたのに比べると、この説明はより科学的である。とはいえ、レドゥエがコンディヤックやトラシーら観念学派の影響を受けていることは否定し難い。彼にとっても、知覚は知性の最初の作用である。記憶や推理など、すべての知的作用が知覚を源泉とする¹⁸。知覚はまた、観念そのものであり、知覚の有無によって、動物と植物が区別される¹⁹。すべての動物が程度の差はあれ知覚機能を持つが、人間の知覚は多様さと正確さにおいて最も優れており、そのために人間は動物に対して優位に立つのだ²⁰。

コンディヤックや観念学派の影響を受けたレドゥエは当然、知覚と意識とを同一視する。彼はデステュット・ド・トラシーと同様の口調で以下のように断じる。「我々は感覚刺激を介して諸印象を受け取る。もし印象が意識を生み出さないならば、それは印象ではない。この意識を取り去ってみよ。印象はもう無いだろう²¹」。確かにレドゥエは、意識されないように思われる知覚の存在を認める。例えば、人は傷の痛みを感じないことがある。しかし、レドゥエはそれを意識と知覚との乖離に帰するのではなく、意識の強度の低下に帰する。例えば、脳の集中の度合いが低かったり、感覚器官が刺激を十分に受け取らなかつたり、刺激そのものが弱かったり、その持続時間が少なかったりする場合、印象を意識する度合いが相対的に弱くなるのだ²²。しかし、器質的な障害が無い限り、まったく意識されない印象は想定されない。レドゥエの見解は18世紀の『百科全書』の解釈を、60年以上を隔ててなお基本的に受け継いでいる。

医学科事典「感覚 (Sensation)」

次に、同じ『医科学事典』の第51巻所収の「感覚 (Sensation)」を確認しよう。執筆者のピロン (François-Marie-Hippolyte Bilon) はビシャの弟子で、パリで博士号を取得した後、グルノーブルの外科医かつ生理学の教師として活躍し、同地出身の作家スタンダールの知人であった²³。ピロンはコンディヤック、トラシー、ラロミギエールらの著作を引用しつつも、生理学的な用語で感覚を説明する。ピロンの感覚概念の特徴は、「印象」と「感覚」とが明確に区別される点である。

生体の組織が何らかの動因によって振動し、変容させられる。これが印象である。この印象が徐々に感覚中枢に到達し、感覚中枢によって、個体はその印象を感じて意識する。これが感覚である。印象が存在するには、刺激物が器官に作用すれば十分だ。感覚が生じるにはさらに、感覚系統の到達点が刺激さ

れた部分に反作用しなければならない。²⁴

印象は感覚器官が外部刺激を受容することで生じるが、それ単独では意識されない。植物や脳の無い生物においては、印象のみが生じる²⁵。他方、感覚とは「我々の諸部分が刺激物と関係し、その接触によって受けた変化の意識を持ち、感じることである」。ピロンによれば、ここでの感覚は観念学派の「知覚」と同じ意味だ²⁶。印象が受動的であるのに対し、感覚は能動的である。また、前者が身体作用であるのに対し、後者は精神作用である。前者に意志は無いが、後者において、意志 (*volonté*) が生じる²⁷。しかし、ピロンは印象と感覚との境界を「分けることができない点」と呼び、印象から感覚がどのように生じるのかを明確にしない²⁸。彼によれば、印象から感覚への移行は、有機的な現象から知的作用への移行を意味するものの、それは「不可解な謎」にとどまる。

したがって、ピロンは注意の介入を意識の起源とするラロミギエールに否定的である。既に見たように、ラロミギエールは感覚と注意を区分し、前者を身体作用と見なし、後者を魂の活動の起源とした。感覚はもともと受動的だが、注意がそこに向けられることにより能動的になる。例えば、「眺める (*voir*)」は受動的で混乱しているが、「見る (*regarder*)」は注意の介入により能動的な識別力を備える。これに対し、ピロンは注意を脳の作用と見なす²⁹。「注意とは実際には、脳自身ならびに印象が由来する器官に対する、多かれ少なかれ活発な脳の反応でしかない。[...] これに基づけば、魂が軽いかあいまいな注意しか払わないと言うことは、脳の中樞が刺激された器官へ、弱いかとりとめのない反応しか向けないと言うことである」³⁰。逆に言えば、いかに不鮮明で混乱した感覚であっても、それが感じられる限り、脳は反応しており、少ないながらも「注意」が作用している。つまり、「眺める」と「見る」の間には、脳作用の強度の違いしかない。結局、意識は既に常に作用しているのだ。

以上のように、ピロンは印象が意識されるにいたるきっかけを明らかにしない。彼はあくまでカトリック教会の不興を買わない範囲内で感覚と意識の関係を説明するにとどまり、精神の生成を身体の生理学的作用に帰すことはない。

医学科事典「感性 (*Sensibilité*)」

次に、同じく第51巻所収の「感性 (*Sensibilité*)」を確認しよう。執筆者のピオリ (*Pierre Adolphe Piory*) は著名な医師で、パリの大病院の教授を務めた³¹。彼は感性を次のように定義する。感性は「動物の有機体のあらゆる行動をつかさどる。すなわち、最も単純な現象、知覚の無いいわば植物的な感覚から、動物性が持つ最も理解し難いもの、思考までつかさどる。それは至高の決定者として生命を構成するあらゆるものを支配する」³²。ピオリにとっても、感性は生物の基本的機能である。そのうえで、彼はビシャの影響のもと、感性を脳に繋がるものと繋がらないものとに分ける。前者はビシャの動物的感性 (*sensibilité animale*) にあたり、知性の起源である。動物的感性は、生体の器官で受容された刺激が神経を通して脳に伝達されることによって可能になる。孤立して存在していた器官が神経を通して、様々な感覚を「魂」に伝える³³。感覚の意識は有機体の能動性の最初の表れで³⁴、そこから様々な観念が生じる³⁵。

これに対し、脳に伝達されない刺激は有機体に受容されるものの、局所組織にとどまり、意識されない。これはビシャの有機的感性 (*sensibilité organique*) にあたる³⁶。この局所的な感性に関わる「諸現象は、刺激が作用した部分の中の自然発生的に決定された変容にしか依存しておらず、意識があつて、熟慮された意志がそのような行動をつかさどったとは想定できないように見える」³⁷。このような感覚のことをピオリは「曖昧な感覚 (*sentiment obscur*)」と呼ぶが³⁸、これは同様にビシャの影響を受けた、メヌ・ド・ピランの「曖昧な知覚 (*perceptions obscures*)」を思わせる。ピオリによれば、生きている有機体のすべての組織が、

潜在的かつ「曖昧な感性 (une sensibilité obscure)」を備えている。この感性は栄養を摂取するために不可欠だが、神経とは無関係で、脳に繋がらない。植物もこの感受性を備えている³⁹。ピオリは脳と切り離されたこの感性のことを局所的感性 (sensibilité locale) とも呼ぶ。

医学科事典「感覚刺激 (Sens)」

続いて、同じく第51巻所収の「感覚刺激 (Sens)」の分析に移る。執筆者のモンファルコン (Jean Baptiste Montfalcon) はリヨンの大病院の医師で、アカデミー会員であり、後にリヨン市についての著作を出版した⁴⁰。彼はまず、感覚刺激の解剖学史を古代から19世紀まで遡り、それと並行して、感覚の哲学史を記述する。18世紀の『百科全書』がデカルトやライプニッツならびにマルブランシュを排して、ロックを支持したのと対照的に、モンファルコンはロックの功績を十分にたたえつつも、その感覚主義に批判的である。彼が拒絶するのは、人間には先験的な魂 (精神) が無いとする論、感覚の発展により後天的に精神が生み出されたとする論だ。ロックから始まり、コンディヤック、デステュット・ド・トラシー、カバニス、そしてガルへと繋がる流れは、モンファルコンによれば、物質主義に行き着く⁴¹。

逆に、彼はデカルトやライプニッツを、「魂の自発的な能動性」を擁護した学者として称賛する。例えば、ライプニッツは思考すなわち概念を感覚の成果と見なさず、むしろ、魂の直接知覚の結果と見なすことで、魂を「感覚刺激の帝国 (l'empire du sens)」から解き放った⁴²。モンファルコンは特にラロミギエールを称賛し、知性 (魂) の源泉を感覚以外に見出したとしてその功績を称える⁴³。モンファルコンによれば、魂には「その本性に固有な本源的能動性 (アクティヴィティ) が備わっている」。能動性は感覚を源泉として後天的に生じるものでは決してない⁴⁴。

もちろん、19世紀の医者かつ知識人として、モンファルコンは感覚を生理学的に説明する。「最初に、感覚器官への何らかの刺激の付与があり、それ故、神経が受け取り脳に伝達する印象が生じる。これが感覚の第一の段階あるいは局面である。脳は印象を受け取って、魂に伝える。魂はその時は受動的だが、変容し、印象を感覚に変えて、脳に逆に作用する。脳自身も反応し、刺激を受けた器官に印象全体を受け取る能力を与える。脳神経と脊髄神経によって活気づけられるすべての組織において、印象は感じ取られる」⁴⁵。印象は受動的であり、感覚は能動的である。前者は意識されず、後者は意識される。神経や脳に器質的な障害が無い限り、印象は感覚に必ず変化する。無意識の感覚はあり得ない。

しかし、モンファルコンは感覚を生理学的に説明しつつも、常に「魂」を介入させる。彼によれば、印象の感覚への変化は、「あらゆる自発的な運動の出発点である」が、この変化が生じるのは「脳の活動によってではなく、魂の変容によって」である⁴⁶。しかも、モンファルコンは魂と脳の関係について、不可知主義を採用する。「魂を脳に結びつける関係は知られていない。我々の感覚の一つが作用する時、我々の非物質的で知的な原理が受ける変容がどんな性質のものか、ほとんど分からない。脳の総体の様々な部分のどれがその部位なのか、全く知られていない」⁴⁷。さらに、彼は行き過ぎた脳の研究が魂の存在の否定をもたらすと警鐘を鳴らす。「脳の神経系の研究、感覚の研究は、もしそれのみを指針と見なすならば、結論を重ねるにつれて物質主義へと至る」⁴⁸。モンファルコンによれば、生理学者や解剖学者であっても、次のように信じることは禁じられていない。すなわち、「精神機能は脳組織の諸結果ではなく、意識、すなわち意志の知的作用 (action intellectuelle) は物理法則から完全に自由なのだ」、と⁴⁹。

医学事典「感覚 (Sensation)」

最後に、もう一つ別の事典、アドゥロンらによって公刊された『医学事典 (Dictionnaire de médecine)』の第一版 (1821-1828) を参照しよう。この事典は全21巻からなり、先に挙げた『医学科事典』全60巻と比

べると3分の1の規模である。宣伝パンフレットによれば、コンパクトで使いやすいことが特徴であり⁵⁰、実際、各項目の定義は簡潔さが目立つ。

第19巻の「感覚 (Sensation)」の執筆者リュリエ (Rullier) は苗字しか知られていないが、パリ大学医学部の出身で、1808年に博士号を取得し、1824年に教授資格を取得した知識人で、パリの病院で医師として活躍した⁵¹。

彼はまず感覚を、五感を通して外部からの刺激を受容する外的感覚と、内臓からの刺激を受容する内的感覚に分ける。内的感覚は心地よさや悪さ等、漠とした気分をもたらす。それが生じるのは、内臓由来の刺激が神経を経由して、脳に伝達されることによってである⁵²。つまり、上記で見たピオリの「曖昧な感覚」とは異なり、リュリエの内的感覚は脳に伝達される。心地よさの気分を作り出すのは内臓ではなく、あくまでも脳である。他方、外的感覚においても、刺激は神経を経由して脳に伝達される。すなわち、まず良好な状態の感覚器官が外部からの刺激を受容し、次に神経がこの刺激の印象を脳に伝達し、最後に「魂」が印象を知る、すなわち意識する⁵³。

また、リュリエは、脳に至らない印象は死滅する、と明言する。

刺激の原因の作用に従う感覚器官の最も好都合な配置がどんなものであろうと、感覚器官はそれ自体では感覚を実現できない。印象を構成する局所的な変容が、どんなものであれ、もし神経によって脳に伝達されないなら、失敗したも同然の印象は感覚器官において死に、いかなる結果にもならないだろう。⁵⁴

脳に伝達されない印象、すなわち、意識されない印象は感覚を構成しない。

興味深いのは、リュリエが感覚主義を否定することである。彼によれば、知性の起源は感覚ではない。その証拠に、知性に劣る動物が感覚において人間より優れている。「感覚機能 (sens) は知的な心の現象の原因や最初の起源ではない。こうした現象にはより高度な源泉があり、実際には脳に関係する。脳は特にその産出を割り当てられているのだ。感覚機能はそれ自身脳に従うため、精神の単なる道具のように現れる。事実、その能動的な行使、意志が命令して、注意の支配下 (sous l'empire de l'attention) でなされる行使によって、感覚は知性を有益な材料で豊かにすることがとりわけできるようになる」⁵⁵。知性の源泉は脳にある。感覚は脳に与えられた材料に過ぎない。

終わりに

以上、18世紀後半から19世紀初頭にかけて思想家たちが感覚をどのように定義したか、そして、諸事典がそれをどのように広めたか、を見てきた。第1章の考察から分かるのは、同時期を通して、フランス哲学がいくつかの問題をめぐって思索をめぐらせてきたことだ。すなわち、まず、感覚と意識を同一視するか否か、言い換えれば意識されない感覚の有無の問題、次に、いわゆる心身問題、とりわけ、精神の起源を何に見出すかという問題、さらには、精神の受動性と能動性の境界をどう捉えるかという問題である。コンディヤックは感覚と意識を同一視した上で、受動性から能動性にいたる感覚の諸段階を想定した。デステュット・ド・トラシーは感覚と意識を同一視するだけでなく、感覚における触発とその知も区別し得ないとした上で、感覚の起源を身体の運動に見出した。ラロミギエールは感覚と意識を切り離し、感覚を受動的な身体機能とする一方で、注意を能動的とし、魂の最初の機能と見なした。また、魂は身体の機能に依存しないため、魂及び注意の起源を身体に求めることは不可能だとした。最後に、メヌ・ド・ピランは感覚を印象の受動的な受容に限り、感覚と意識を同一視せず、意識の介在しない印象の存在を認める一方で、エフォートの伴う

運動を精神（意識）の能動性の起源と見なした。

第2章で明らかになったのは、感覚と意識の関係に関して、18世紀後半には1つの考え方が、19世紀初頭には様々な見解が普及したことだ。

まず、18世紀後半の『百科全書』は意識と感覚を同一と見なした。どれほど微小な知覚であれ、魂の管轄の外に逃れるものはない、とされた。19世紀初頭の医学事典においては感覚の定義はより生理学的である。本稿で参照した諸項目の執筆者は社会的地位を有する医師であり、彼らの記述は王政復古期において無神論者の誇りを受けない程度に物質主義的であった。彼らは皆、感覚と意識を脳と神経の作用によって説明した。保守的な執筆者であっても、印象と感覚の区別を行う傾向が見られた。すなわち、刺激が感覚器官に与える印象と脳に伝達される感覚は区別された。魂の活動としての意識は脳という部位に結びつけられたが、当時の科学では意識を生み出す脳のメカニズムは全く謎に包まれており、脳の活動と魂の活動を本質的に異なるものと見なす者さえいた。物質に還元されない魂（*âme immatériel*）の存在は、医師たち自身の論述の限界として設定されたのである。19世紀初頭において特徴的なのは、同じ事典の中でも巻や項目が異なり、著者が替わると、全く異なる感覚観が語られることだ。医師たちの間にも意見の一致が見られていなかったことがわかる。

本稿の目的は、19世紀初頭における感覚観の変化を明らかにすることで、今後のフランス文学における描写研究の基盤を形成することであったが、その目的の一部は果たせた。今後の課題は、作家の感覚観を分析し、観念学派や医学的知見からの影響を考察することである。我々の射程は主に19世紀中葉から後半にかけてのフローベールの書簡だが、将来的には、一世代前のスタンダールの『感覚論』を含め、コーパスをより広範に設定することが求められる。

注

- 1 Philippe Dufour, «Éloge de la dépersonnalisation», *Poétique*, Le Seuil, n.156, avril 2008, p.393. <http://www.cairn.info/revue-poetique-2008-4-page-387.htm> (2022年6月3日閲覧)。
- 2 Etienne Bonnot de Condillac, *Œuvres complètes de Condillac*, t.3, *Traité des sensations*, C. Houel, 1798, p.50. 以下、同書について略号Sを用い、引用末にページ数と共に付記する。
- 3 ただし、コンディヤックが『感覚論』の後に書いた『動物論』によると、人間の能動性の極致である思考や意志の能力でさえ繰り返されることで習慣化し、個体は思考や意識、さらに意志を欠いたまま、日常的な生活を送ることになる。コンディヤックは思考を失った習慣を本能と見なす。コンディヤックの習慣論は、観念学派の習慣論の端緒となるが、ここでは触れない。Etienne Bonnot de Condillac, *Œuvres complètes de Condillac*, t.3, *Traité des animaux*, C. Houel, 1798, p.555.
- 4 Destutt de Tracy, *Éléments d'idéologie*, t.3, Paris, Mme Ve Courcier, 1818, p.226. 本稿では同書第3巻と第1巻を引用する。Destutt de Tracy, *Éléments d'idéologie*, t.1, Paris, Mme Ve Courcier, 1817. 以下、同書について略号Eを用い、引用末に巻とページ数を共に付記する。
- 5 Pierre Laromiguière, *Leçons de Philosophie ou Essai sur les facultés de l'âme*, t.1, Brunot-Labbe, 1823, p.163-164. 以下、同書について略号Lを用い、引用末にページ数と共に付記する。
- 6 Serge Nicolas, Anne Marchal et Frédéric Isel, «La Psychologie au XIXème siècle», *Revue d'Histoire des Sciences Humaines*, Éditions Sciences Humaines, n.2, 2000, p.79-80.
- 7 Pierre Maine de Biran, *Influence de l'habitude sur la faculté de penser*, in *Œuvres philosophiques de Maine de Biran*, publiées par V. Cousin, t.1, Paris, Librairie de Ladrangé, 1841, p.18. 以下、同書について略号Hを用い、引用末にページ数と共に付記する。
- 8 Pierre Maine de Biran, *Mémoire sur les perceptions obscures*, Armand Colin, 1920.
- 9 «Qu'est-ce que l'Encyclopédie ?», l'Édition Numérique, Collaborative et CRitique de l'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des

- sciences, des arts et des métiers* (ENCCRE), <http://enccre.academie-sciences.fr/encyclopedia/documentation/?s=1&> (2022年7月3日閲覧)。以下、『百科全書(*Encyclopédie*)』の引用はENCCREを参照する(<http://enccre.academie-sciences.fr/encyclopedia/>)。
- 10 *Encyclopédie*, article «Perception», t. XII, 1765, p.327a.
 - 11 *Encyclopédie*, article «Conscience», t. III, 1753, p.902a.
 - 12 *Encyclopédie*, article «Perception», t. VII, p.327b.
 - 13 *Ibid.*, p.327b-328b.
 - 14 Clyde Plumauzille, «Élaborer un savoir sur la sexualité: le *Dictionnaire des sciences médicales* (1812–1822)», *Clio. Femmes, Genre, Histoire*, n.31, 2010, mis en ligne le 23 août 2013, <http://journals.openedition.org/clio/9611> (2022年7月15日閲覧)。
 - 15 Gustave Flaubert, *Madame Bovary, Œuvres complètes*, t.3, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, p.177.
 - 16 Comité des travaux historiques et scientifiques, «Sociétés savantes», <https://cths.fr/an/savant.php?id=4594> (2022年8月2日閲覧)。
 - 17 *Dictionnaire des sciences médicales*, Paris, Panckoucke, t.40, 1819, «Perception» par Pierre Reydellet, p.275.
 - 18 *Ibid.*, p.262.
 - 19 *Ibid.*, p.273.
 - 20 *Ibid.*, p.263.
 - 21 *Ibid.*, p.267.
 - 22 *Ibid.*, p.268 et 274–276.
 - 23 Jean Théodoridès, «Stendhal et Bichat», *Histoire des sciences médicales*, Paris, les Éditions de médecine pratique, t. VI, n.2, avril-mai-juin 1972, p.107–111.
 - 24 *Dictionnaire des sciences médicales*, Paris, Panckoucke, t.51, 1821, «Sensation» par François-Marie-Hippolyte Bilon, p.64.
 - 25 *Ibid.*, p.68.
 - 26 *Ibid.*, p.65.
 - 27 *Ibid.*, p.72.
 - 28 *Ibid.*, p.72.
 - 29 *Ibid.*, p.75.
 - 30 *Ibid.*, p.74.
 - 31 Alex Sakula, «Pierre Adolphe Piorry (1794–1879): pioneer of percussion and pleximetry», *Thorax*, n.34, 1979, p.575–581, <https://thorax.bmj.com/content/thoraxjnl/34/5/575.full.pdf> (2022年8月4日閲覧)。
 - 32 *Dictionnaire des sciences médicales*, Paris, Panckoucke, t.51, 1821, «Sensibilité» par Pierre Adolphe Piorry, p.88.
 - 33 *Ibid.*, p.92.
 - 34 *Ibid.*, p.88.
 - 35 *Ibid.*, p.89.
 - 36 *Ibid.*, p.90.
 - 37 *Ibid.*, p.88.
 - 38 *Ibid.*, p.88.
 - 39 *Ibid.*, p.96.
 - 40 Comité des travaux historiques et scientifiques, «Sociétés savantes», <https://cths.fr/an/savant.php?id=1468> (2022年8月4日閲覧)。
 - 41 *Dictionnaire des sciences médicales*, Paris, Panckoucke, t.51, «Sens» par Jean Baptiste Montfalcon, p.22–23.
 - 42 *Ibid.*, p.58.
 - 43 *Ibid.*, p.23. モンファルコンはラロミギエール (Laromiguière) をド・ラ・ロミギエール (de la Romiguière) と呼ぶ。
 - 44 *Ibid.*, p.23.
 - 45 *Ibid.*, p.49.
 - 46 *Ibid.*, p.46.

47 *Ibid.*, p.50.

48 *Ibid.*, p.56.

49 *Ibid.*, p.57.

50 *Dictionnaire de médecine*, t.1, Paris, Béchét Jeune, 1821, «Prospectus», p.2.

51 Jean-Eugène Dezeimeris, *Dictionnaire historique de la médecine, ancienne et moderne*, Paris, Béchét Jeune, 1839, p.37.

52 *Dictionnaire de médecine*, t.19, Paris, Béchét Jeune, 1927, «Sensation» par Rullier, p.262–263, p.265–266.

53 *Ibid.*, p.254.

54 *Ibid.*, p.256.

55 *Ibid.*, p.267.